

# ひとり歩きの「ムーンウォーカー」

戸塚ひろみ

一、ある噂ーマイケル・ジャクソン

極秘来日……か！

電話というメディアが、重要なコミュニケーションの道具として我々の日常生活に浸透し始めてすでに久しい。我々は、このメディアから、多種多様な情報を授受しており、現代のフォークロアを考へる場合、情報ネットワークとして機能する電話の存在は無視できないであろう。

今回取り上げる歌手マイケル・ジャクソン（以下M・ジャクソン）の噂話も実は、受話器の向うからもたらされた話なのである。つまり、現在は、人と人が相互に顔を合わせなくとも、一本の電話を通して、噂話がスタートする。

一九八八年十二月一日夜、知人のAから電話が入った。M・ジャ

クソン初主演『ムーンウォーカー』<sup>(1)</sup>を上映中の新宿の映画館からかけているという。その前置の後、「知ってる？ M・ジャクソンがもう日本に来ているんだって。」との言葉が耳に飛び込んできた。混乱気味の私に構わず話は続いたが、ストーリーはおおむね次のようであった。

Aがいる映画館に、二、三日前日本にいる筈のないM・ジャクソンが自分の映画を見に来たという話なのだ。若い女性観客が多い館内では、この「M・ジャクソン極秘来日」の話題で持ち切りだったという。実際、同館で、マイケルに会った人も来ているとか、映画館の人も本当だと言っていたなど、誰れかれとなく噂が飛びかっていたらしい。たまたま『ムーンウォーカー』を見に来たAが、その話を聞いて私に知らせてきたのである。受話器から聞こえてくるAの声には妙なりアリティがあつて、私の想像力を充分に刺激した。M・ジャクソンが十二月九日から、日本公演を行うのはすでに知ってはいしたが、再来日自体がいつなのかは公表されていない筈だ。

それなのに、ここへきて、降って湧いたような「極秘来日」の話である。Aからの情報は、予想外の事であったため、私はなんとも信じられない気分電話を切った。

そもそも人が知らない、より新しく刺激的な情報はそれだけで価値が高い。ましてや、話す相手にとつてその情報が重要である場合には一層の意味を持つ。それゆえAの口ぶりからは、ある種の満足と優越感がただよっている気がしたのであった。

M・ジャクソンは本当に極秘来日したのだろうか。それとも全くの噂なのか。いずれにせよ、私は突然都市空間に飛来した「ムーンウォーカー」の足どりを追いつつ実体を確かめる事にした。

## 二、「噂」と噂に翻弄された人々

ここでは、極秘来日をめぐる噂と背景について整理してみたい。まず一つには、マイケルの日本来日の件で、この話は過去にも何度か報道された事があった。例えば、一九八五年十一月一日発行「週刊平凡」には、M・ジャクソンがチャリティーに出席のため来日するとして、司会者や招待客まで書いた具体的な記事をのせたが、これは実現していない。

また、一九八七年九月初公演が正式決定後も、『アサヒ芸能』<sup>(4)</sup>は、「M・ジャクソン来日公演中止にこれだけの根拠」という見出しで、マイケルの精神状態が不安定等の理由で来日中止の記事をのせた。結局、誤報であり、同公演は予定通り行なわれた。そして今度は反対に公演終了後に、すぐに再来日の噂が流れたりしたのであ

<sup>(5)</sup>る。つまり、彼の一連の来日報道には、常に期待感と「本当に来日するだろうか」といった漠然とした不安が入り混じっているように見える。すなわち我々の感情を反映したような内容といえよう。そして、八七年待望の来日が決まると、各雑誌はこぞって、M・ジャクソンの特集を組み、彼の詳しい情報を記載しはじめた。その中に、マイケルの日本でのプライベートタイムの予想が出ている。そこに行けば、M・ジャクソンに会えるかもしれないのである。他のスターとは行先が違うのではという事から、データーとして、美術館や動物園、エレファントマンの骨を欲しがっているから目黒の奇生虫博物館へ行くかも知れないといった類が挙がっていた。このほか多かったのが東京デイズニerland。デイズニーが大好きで、自宅もデイズニerlandのように改造しているらしいとか、自分の作品は見るので、『キャプテンE.O.』<sup>(6)</sup>を上映中の同園には必ず行くといった情報である。自作を見るという点は、新宿の映画館へ行った噂と重なって興味深い。また、これらとは反対に、人嫌いのためステージとホテル以外で、姿を見るのはほとんど不可能ではないかといった悲観的な記事も出ている。実際に蓋を開けてみるとマイケルは、「極度の人間嫌い」とのうわさから、「変装をして隠密に動くのではないかと、まことしやかに囁かれたが、来てみると大違い。(略)『ありがたみがなくなる』という声が出るほど、人なつっこいところを見せた」<sup>(7)</sup>のであった。ステージのオフには、良く外出しに周知のように、後楽園遊園地やデイズニerlandも、無料で借り切って遊んだのである。ただし、行先はほとんどいつも不明で、「神出鬼没」の噂通りではあったのだが。

ところで、この噂にはいま一つ語られた場所の問題がある。映画館は、複数の見知らぬ人々が集まる構造的に特殊な閉じられた密室空間だ。E・モランは、「映画」というスペクタクルは、あらゆるスペクタクル同様、いやそのどれよりもはげしく、観客と提示される行為との間に、心的同一化の過程を含んでいる。観客は、映画のヒーローの架空で、充実し、勇ましく、愛にみちた生活を心的に生きる、つまり彼らに同一化する」と、指摘した。観客が、このような心理的狀態に陥りやすい映画館で、来日の噂は発生したのである。

丁度、時期的に言っても、マイケルの日本公演まであと約一週間と迫ってきただけに、同館にいたファンの間には、彼の来日を待望する共通のムードがあつたとも思われる。ファンとはスターの全てを知り、会ってみたいのである。特に、外国からのスターは、実際に見るチャンスは滅多にない。しかし、来日さえしていたならばどこかで出会え、握手やサイン位貰えるかもしれないのだ。そんなファンの心性が、M・ジャクソン本人が、「ムーンウォーカー」を、普通の映画館にお忍びで見に来たという話をも信じてしまう。映画を観に集まったにすぎない他人同士が数時間（上映時間中）の間に噂を共有する事で、互いを結ぶ紐帯を形成してゆくのである。信じられそうもない情報を陵駕する想像力でも言おうか。この力が、現実を超えて「ムーンウォーカー」を一人歩きさせたのである。そして、その背景には、前回の来日で得たマイケルの行動や、映画館という装置、及び公演間近といった要因が重なったと考えられるのである。

以上、簡単に噂の背景について触れたが、次にこの話の語り手達

にも言及しておきたい。私自身、いかにしてM・ジャクソン現象の中に巻き込まれたかを、自分の記憶を動員して検証しておこう。

極秘の二文字に凝縮された来日騒動の外にいた人々は、ともかくも知らなかったというダメージを回復し曖昧な状態からの脱出を試み始める。例えば、友人達は次のような憶測を述べて噂を増幅させた。

☆八七年の公演後離日する際に、M・ジャクソンは、再び日本に來ると約束したメッセージを残したので、必ず来ている。

☆すつかり日本最頂になったと報道されているから、密かにいるかもしれない。

☆だが、来日しているならば、なぜマスメディアは騒がないのか。

それは、成田空港から入国しなかったからではないのか。横田基地を経由する極秘のルートで入国できるらしい。

このように、考えられる事が出尽くすと、今度はマスメディアからも情報を得ようとする。未発表の情報があるかもしれないからだ。私が招聘元の日本テレビへ問い合せると、係の若い女性が抑制した声で、来日がいつかはわからない旨の返答だけをくり返した。仕方がないので、今度は写真週刊誌へ電話をかけた。A誌では、十二月二日の時点では全くこの情報をつかんではいなかったようだ。次に、B誌へ尋ると、即座に「どうもそうらしい。新宿のホテルで見かけたという情報が入っているので、うちでも確認を急いでいるところですよ。」という返事であった。

やはり来日しているのだろうかと思いをめぐらしていると翌三日の『報知新聞』のコラムに、「マイケルを見かけたという人がいる

んですが、もう来日しているんですって?』と本社に何本もファンから問い合わせの電話。(略)公演を行うマイケル・ジャクソンが、すでに極秘来日しているとのうわさが、ファンの間を駆け回っているらしい。前回の来日の時も、日時は極秘扱いされ、ファンはその日を確めるのにやっきになった。(略)主催の日本テレビ側では『極秘来日などということは絶対ありません。いつ来日するかは、五日になればはっきりします』と、怪情報を抑えるのに大わらわ。(傍点筆者)という記事が載った。私がAから一日に聞いて二日後には、マスメディアによって取り上げられたのである。M・ジャクソンをコアに来日の噂が都市空間に急速に拡大し、浮遊したのであった。

十二月五日の日本テレビでは、四時五十四分から「マイケル・ジャクソン情報」という短い公演の宣伝を流しただけで、来日情報は触れなかったのである。結局、この噂は、M・ジャクソン本人が十二月八日四時すぎにJALで成田に来日した日本テレビの六時のニュースと、翌朝の各新聞によって、我々が確認した段階で終息をみた。十一月下旬から約一週間あまりの噂であった。

### 三、遊歩するもう一人のマイケル

ここで、種明かしをしておこう。極秘来日した人物は、実はM・ジャクソンのそっくりさんだった可能性が濃厚なのだ。そっくりさんは、通称ジャイケルと呼ばれるアメリカ人のウィリアム・ホールで、彼は本物のM・ジャクソンより早く、十一月二十七日に来日し

ている。そして、「新宿の映画館で公開されているマイケルの主演映画『ムーン・ウォーカー』を観に行ったり、六本木のデイスコに出没したりして、一般の人々を混乱に陥れ<sup>9)</sup>」たそうだ。つまり、新宿の映画館に現われたM・ジャクソンは、このそっくりさんという訳だ。ジャイケルは、マイケルが整形するたびに自分自身も整形を重ね、非常に本人に良く似ているらしい。斉藤剛は、「ボクらがみても一瞬、見間違っうほどだから、一般の人は大変ですよ。マイケルを六本木のデイスコで見たのだ、すでに来日してたんじゃねえかよ、嘘つきとか、電話がパンパンかかってきて応待に苦労しましたよ。中には六本木で撮った彼の写真をフライデーに持ち込もうとした奴もいて……<sup>10)</sup>」といったような騒ぎを引き起していたのである。むろん、日本テレビでも、そっくりさんが来日するのは知らなかったそう。このような状況を考慮すると、ファン達が暗い館内で、ジャイケルの姿をみて、マイケルと見間違えたのも無理はあるまい。映画館の人も、「(マイケルとは思わなかったが)良く似ているなあ」と、思ったという。当のジャイケルは、映画館に、二、三人連れでブラリと来たそうで、その場では何の混乱もとりあえずはなかったという。だが、しかし、日を経ずしてたちまちのうちに、M・ジャクソンが来日しているという今回の話が広まる事になったのである。特に、今公演は、マイケルがステージ活動からの引退を表明しているため、日本では見納めになるのである。これは、M・ジャクソンを見るチャンスがほとんど無くなる事でもあった。このような状況の最中に、そっくりさんが来日したのである。

M・ジャクソンの噂を追つてくると、しばしば現代社会は情報が

氾濫していると言われるが、果して本当なのか疑問になつてくる。

広く浅く情報は流れるが、各個人が知りたい事が得られるとは限らないのだ。マイケルのコンサートが十二月九日から東京ドームで開催される事だけが発表されたにすぎず、来日がいつかは最後まで知らされなかった。いわば、九日の公演当日までは、マイケルに関する情報の空白期間であつたといえよう。そして、ジャイケルは、その隙間に滑り込み、結果極秘来日の噂が加速度的に広がる事となつた。マスメディアの関与できないインフォーマルな情報「ムーンウォーカー」を映画から飛び出させてしまった。メディアが我々の知りたい欲求に応えられない場合、噂が生まれる。そして、メディア側が噂に気づき追いかける、あるいは沈静化させようと試みる。

「同局（筆者注日本テレビ）の関係者が二日に成田空港へ出向いて、空港当局と警備の打ち合わせをしているのを見ても、二日現在、来日していないのは間違いない。ではいつ来日するのかとなると、有力なのが日本ツアー初日前日の八日（略）」<sup>11</sup>

同記事の予測通り、八日マイケルは来日した。この日をもつて、

極秘来日の話は一息つくのだが、また別な噂が生まれはじめた。というのも、昭和天皇の病状の影響であろうか、前回と異なり極端にマイケルのテレビ報道は少なかった。「昨年比で追っかけファン<sup>12</sup>の数ははるかに増えたが、マスコミの熱意は、天皇陛下のご容体悪化のためかいまひとつ。しかし、そのためマイケル本人は自由に出歩けたようだ（略）。後半になると隠密外出になりまかれたファンも多かった」<sup>12</sup>ようで、新聞社への問い合わせが急増したという。八七年の時は、連日のようにマイケルの立ち寄り先のビデオ店、デパー

ト、本屋、おもちゃ屋等が放映された。今回は、事情が変わり、マイケルのイメージが我々に充分与えられなかったためか騒動も起きたという。

「『マイケルが地方に現れた』『本人にサインをもらった』という話が全国のあちらこちらで聞かれるのだ。公演を主催する日本テレビによれば「一歩も東京を離れていない」というのに……」<sup>13</sup>

あの「偽物」のジャイケルである。彼が、デイスコのオープンセレモニなどで各地を公演して回っていたための噂であつた。M・ジャクソンが映像に露出しない分だけ、マイケルを追う視線がジャイケルへと収斂していく事になる。マイケルとジャイケル、「本物」と「偽物」。「偽物」だからと言ってジャイケルには、責任はない。<sup>14</sup>我々の側が、ジャイケルの向うにマイケルをイメージしただけなのだ。

#### 四、幻想としてのM・ジャクソン

ここでは、M・ジャクソンと彼を支えるファンにスポットを当ててみたい。もとより、スターにはゴシップがつきものだが、M・ジャクソン程話題にこと欠かない人物もあるまい。アルバム及びビデオの『スリラー』の大記録をバックに、ビジネス面では大成功を収め、名声と巨万の富を得ている。その反動とでもいおうか、プライベートな面では、極端な彼の奇行ぶりが報道されている。有名なのは、顔の整形だ。整形するのを「マイケル」というそうだが、最先端の医療技術を馳使し皮膚を脱色し整形をくり返して、以前の顔と

はガラリーと変えてしまった。顔について、体型自体も拒食症とまで噂される位のダイエットにより、スリムになった。<sup>17)</sup>この徹底的な自己の身体的改造の実行は、デビュー前ならいざ知らず、すでにスターになってからだけの事に、インパクトは非常に強烈だったのであり、驚きより奇異に感じられ噂的になったのであろう。

この他にも様々な噂が語られているので列挙してみよう。☆酸素カプセルで寝ている。☆動物と子供が好きで、チンパンジーが唯一の友達。☆同性愛者である。☆去勢されている。☆高声を出すため女性ホルモンを打っている。☆拒食症で餓死寸前。☆自宅をディズニースタンドのようにしている。☆マリリン・モンローの墓地を買収するらしい。☆蒸溜水で入浴する。☆整形の顔がくずればはじめている。☆韓国の済州島を買収計画中かなど、どれも一風変わった内容の噂が多いようだ。このような噂を助長する原因は、おそらく一九八二年以降マスコミのインタビューに答えていないことや、自叙伝で、「できる限り個人的なパブリシティをさけ、また、できる限りプロフィールも謎に包ませておくべきだ」という本人の姿勢も関係しているかと思われる。

だが、しかし、いかなる理由よりも、誰れの眼にも明らかな成功と変貌した身体、それに比べ謎に包まれた不可視のつくられた私生活との落差が激しいため、好奇の対象となるのであろう。

ところで、こうした彼の奇行ぶりもファンにとっては関係がないようだ。日本のファンも熱心で、公演地はもとより、外出先や滞在中のキャピトル東急ホテルまでおいかけて行く。ホテル側でもファンの応待に忙殺されたようで、「ホテルマンが見たマイケル・ジャ

クソンの素顔<sup>19)</sup>」に苦心談を書いている。子供好きなマイケルのプライベートタイムの姿や、ファンの様子が窺えて興味深い。また、『おっかけ』という本には、ホテル周辺でマイケルを待ち、おっかけをして最終的には八七年のアメリカ公演にまで出掛けた女性のおっかけストーリーが収められている。その中に、M・ジャクソンに握手してもらった様子が感激と共に、「思い出しただけでも、涙出そう。マイケルの手は、乾いていてちよつとザラツとしたカンジ。体はそんなに大きくないのに、手はやたら大きかった。そして、唇がとってもきれいだっただけ」<sup>20)</sup>とつづらられている。このほかにも、仕事をやめて、追っかけをした女性や、母子でマイケルを追ってオーストラリアまで行ったファンもいるのである。

何故、仕事をやめてまで、そして自腹を切つてまでして、追いかけるのであるうか、単に、熱心で好きだからでは、この「おっかけ」という身体的ありようは言いつくせないと思われるのである。スター、この場合は、M・ジャクソンを追い求めて、本人を「見たい」という衝動に動かされるからではないだろうか。この本物に会うといった直接的体験願望は、我々をとり巻く社会環境の投影と思われる。つまり、「おっかけ」とは、間接的経験を余儀なくされている社会によってつくりあげられた想像力の一つではないだろうか。翻ってみると、M・ジャクソンはビデオ時代の到来に先がけて映像と音楽を結びつけ「スリラー」を生み出し、テレビやビデオという日常的なメディアを通じて世界中へ浸透した。飲料水のCFやディズニースタンドで我々は、来日前から日常的にM・ジャクソンを見続けてはいた。しかしそれは、映像によるいわゆる情報化されたマイ

ケルにしか接していない事でもある。つまり、間接的体験でしかないのだ。しかも、この事を我々は普段意識はしていない。経験があると思うが、有名人と出会ったりすると、「テレビよりやせている」とか、「映画で見たよりも背が高い」など、無意識に比較している。これらは、我々の映像を通した間接的体験が、現実と同等にリアリティを持ってしまった事を示している。映像のものさしで、本物をみはじめた証拠である。ただし、問題なのは、我々がこの状態に必ずしも充足していない点だ。むしろ、我々の想像力が、社会によって間接化されているのがゆえに、直接的体験を追求するのではないだろうか。間接的体験は、間接的でしかなく、映像のマイケルでは、マイケルの手の暖かさや唇の美しさは、わかからない。追っかけをしてこそ知る感覚なのであり、この時M・ジャクソンは、はじめて「私のM・ジャクソン」(傍点筆者)になりうるのである。そして、M・ジャクソン極秘来日というストーリーをつくりあげた想像力は、直接的体験を希求する想像力と通底するものと言えるだろう。そのように考えてくるとあの「偽物」ジャイケルの持つ意味も、単なる偽物として片付ける訳にはゆかなくなるだろう。我々が触れているM・ジャクソンが既に間接的に与えられたイメージである限り、それはもともと「本物」「偽物」という対比を超越した存在だ。

だから東京に出没したジャイケルは我々のM・ジャクソンという間接的イメージの体験の中に融解し、噂として一人の「幻のM・ジャクソン」を生み出し、そしてまた「おっかけ」は、ジャイケルとの出会いの瞬間、直接的経験としての「マイケル」を等身大のレベ

ルで引き寄せることができたのだ。しかし、その引き寄せられた「マイケル」も、一人一人のファンの中で醸成された「マイケル」というイメージとして、個々の記憶の中に蓄積され、あの間接的イメージとしてのマイケルを補強する要素となつてゆく事を指摘しない訳にはゆかないだろう。マイケルは、やはり、イメージの中で生き続ける以外にない。

当のマイケルは、こう呟いている。

「みんな、僕のことを誤解している

僕のことなんて知らないくせに……

(A lot of people misunderstand me

That's because they don't know me at all.)<sup>(2)</sup>

それも、間接的メディア、レコードの向こうから。

### 【注】

- (1) SF映画で、ムーンウォーカーは、M・ジャクソンを指す。日本では、一九八八年十月二十九日から一般公開されたが、「極端に東京に偏った都市型の人気」(『日刊スポーツ』日刊スポーツ新聞社、一九八八年十二月二十七日)の映画と言われている。

- (2) ソロとしては、一九八七年について二度目。公演は、十二月九日から二十六日まで計九ステージが予定されていた。

- (3) R・L・ロスノウ、G・A・ファイン(南訳)『うわさの心理学』岩波書店、一九八二年、一四七—一四九頁。

- (4) 徳間書店、一九八七年七月二十三日発行、四二頁。
- (5) 『日刊ゲンダイ』(講談社、一九八七年十月三十日発行)に、「西武グループの担当者が、公演中にマイケルとひそかに接触し、来年コンサートを開くことで合意したという話」だが、招聘元と噂される当の西武側では全面的に否定している記事が載った。
- (6) 日米両デイズニールランドでのみ上映されているM・ジャクソン主演のSF映画。
- (7) 『週刊読売』読売新聞社、一九八七年十月十八日発行、三四頁。
- (8) E・モラン(渡辺・山崎訳)『スター』法政大学出版社、一九七六年、一〇八頁。
- (9) 『週刊プレイボーイ』集英社、一九八九年一月十七日、五二―三頁。
- (10) 同右。
- (11) 『報知新聞』報知新聞社、一九八八年十二月三日発行。
- (12) 『報知新聞』報知新聞社、一九八八年十二月二十七日発行。
- (13) 『サンデー毎日』毎日新聞社、一九八九年一月八・十五日合併号、一四頁。
- (14) 海野弘「廣作の記号学」『風俗の神話学』思潮社、一九八三年、一〇三頁。
- 「ほんもの、にせものとの関連で記号を考えてみると、記号はあるものを指示するが、ほんものかにせものかといった判断には関係がないのである。時には、指示するものが、実

- 在するかどうかにも関係がない。」と述べている。
- (15) この事情については、三井徹『マイケル・ジャクソン現象』(新潮文庫、一九八五年)にくわしい。
- (16) 猪野健治編『現代若者コトバ辞典』日本経済評論社、一九八八年。
- (17) 三井前掲書。三井は、マイケルの整形顔や音楽性、爆発的人気現象を分析し、その背景に黒人文化に対するアメリカ社会の深層心理を指摘している。
- (18) M・ジャクソン(田中訳)『MOON WALK』CBSソニー、一九八八年、二八四―二八五頁。尚、書名は、M・ジャクソンの得意とするステップの事。
- (19) 平瀬嘉英『中央公論』中央公論社、一九八七年、二七四―二七七頁。
- (20) 淡路町ペンクラブ『おっかけッ』ワニブックス、一九八八年、一九頁。
- (21) 「just can't stop loving you」アルバム『BAD』より。(とじか・ひろみ)「柳田国男研究会」